

基礎学力の定着を目指す指導と評価

- 評価方法を中心に -

教科教育研究室研究会議

葉倉 朋子

佐藤 剛

白井 理

行川 博幸

前島 和樹

吉田 和江

主題設定の理由

学習指導要領が全面実施され2年目の2003年度、全国教育課程実施状況調査(小・中学校においては2001年実施、高等学校においては2003年実施)の調査結果、また、国際数学理科調査、OECDの調査結果等を受けて、2003年12月26日に学習指導要領の一部改正が示された。次々と提示される教育改革の中で、学校教育に直接かかわる私たちは、目の前の子どもたちをしっかりと見据えながら、これからの学力や学校教育の在り方について考えていく必要がある。

近年の学力に関する論議とともに、21世紀を担う子どもたちに求められる学力とは何か、学校教育に携わる私たちは何をどのように考え、実践していけばいいのか。当センターでは、平成14年度に「教科における基礎学力の育成を目指して」についての指導主事研究を行い、市内の全小・中学校・全高等学校・養護学校を対象にした学力についての意識や実態の調査を行った。そこから、これから求められていく学力について、また、教科における基礎学力について整理した。

そこで、今年度は、教科の基礎学力をより具体化する指導と評価について研究を進めることとし、特に、評価方法に焦点を絞り、次のような研究主題を設定した。

「基礎学力の定着を目指す指導と評価 - 評価方法を中心に - 」

研究の内容

1 意識調査からみえるもの

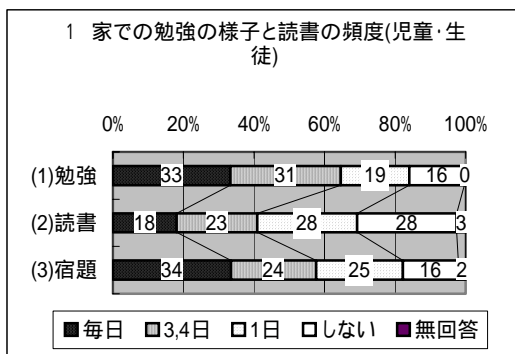
当センターでは、平成15年12月に市内の小学校18校、中学校9校、の小学校5年生、中学校2年の全児童生徒、その保護者、教員を対象に、「学力についての意識調査」を行った。この調査は、東京大学基礎学力研究開発センターとの連携で、これからの学校教育の在り方を探ることが目的のものである。

その調査の中から、子どもたちの家庭での過ごし方や、保護者のかかわり、授業の受け方の傾向、学習動機への傾向、学習スタイル等が見えてきた。調査結果は、小・中学校合わせたものである。

(1) 勉強の頻度と読書の頻度

勉強の頻度は、「毎日勉強する」「週に3日か4日勉強する」を合わせて三分の二の割合である。一方、

読書は、「週に一度」「ほとんど読まない」を合わせて三分の二であり、勉強の頻度に対して読書の頻度は少ない現状である。



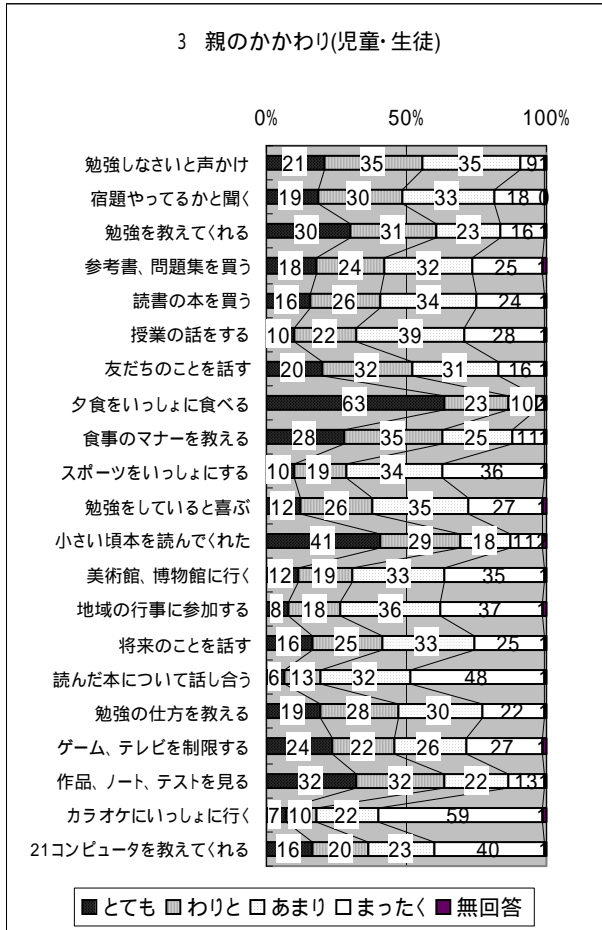
(2) 家での学習や生活の様子

家庭での子どもの時間の使い方として、勉強時間の平均時間は一日1時間半であるが、勉強をしている子どもとしていない子どものばらつきが多い。ビデオやテレビの時間は平均3時間半で一番多く、宿題以外の時間(塾を含む)が1時間30分、ゲームの時間が1時間10分、読書

や宿題の時間がそれぞれ約 35 分である。

(3) 親のかかわり

子どもへのかかわりは、「わりとよくかかわる」「あまりしない」に集中している。小さい頃、本を読んでもらった子どもは「とてもよくする」「わりとする」を合わせて、約 70%であり比較的多い。が、読んだ本について話し合うことは、「あまりない」「まったくない」を合わせて約 80%と少ない。ここから、子どもにとって受身の

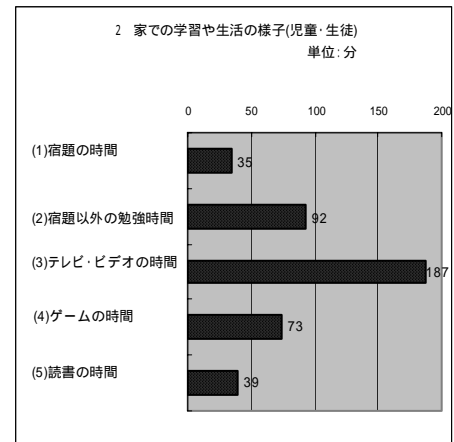


かかわりが中心であり、能動的なやりとりのかかわりは少ないことがとらえられる。

かかわりが中心であり、能動的なやりとりのかかわりは少ないことがとらえられる。

(4) 授業の受け方

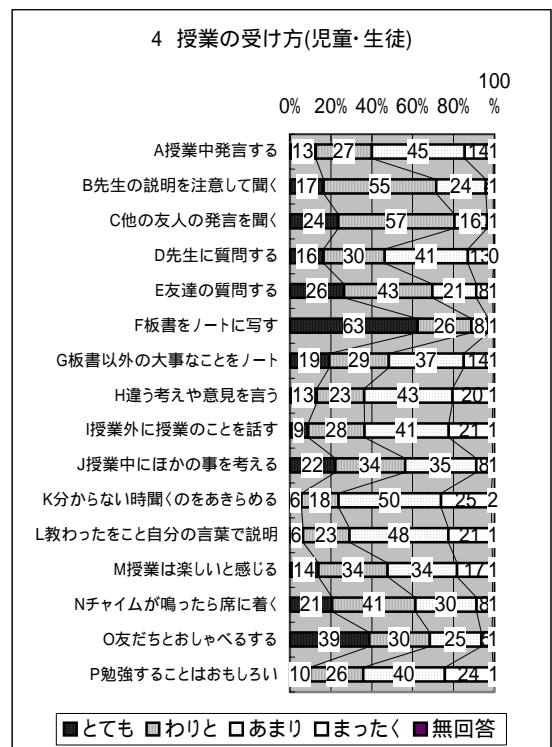
「黒板に先生が書くことをノートに写す」は 40%弱で、かなりの子どもが授業の中で、先生の書いたことをノートに写すを行っている。



(5) 学習動機

勉強は役に立つから、新しいことを知りたい等の実用志向、充実志向が共に 10%である。逆に、みんながやるから、尊敬されるから、ほめてもらえるから、といった人との関係志向、自尊志向、報酬志向はやや低い。

以上の調査から、子どもが自ら働きかける力が低くなりやすい、環境や周囲のかかわりが見えてくる。また、勉強はするが、想像力を培う、また、他者の目でものを見ていく力が育ちやすい読書はあまりしない現状がある。このことから、子どもたちに心の豊かさを育てるための教育や、働きかけるかかわりを育てる必要性を感じる。



2 豊かな人間性・社会性の育成と学力

人間性や社会性といった全人的な資質・能力は、様々な遊びや体験、学習を通して身に付くものであり、幼児期から青年期にその基盤が形成される。また、生涯をかけて自らの主体的な努力によって深め

られていくのである。

人間は社会の営みの中でこそ存在し成長し続けるものであろう。人とかかわり合いながら自分らしさを発見したり自分のよさを伸ばしたりして、よりよい自分を求めていく。そのことが、豊かな人間性を身に付けていくことにつながる。かかわりは、家族、学校、地域、社会と次第に大きく広がるが、その中で他者を意識し自分はどのように行動したらよいのか、どうあるべきか、などのように判断が求められる。人と人とのかかわりを能動的にとらえることによって社会性も身に付いていくのである。また肯定的な人間関係や協働を通して人間性・社会性もより豊かになっていく。このように考えると、豊かな人間性・社会性は、ともに育ち、身に付いていくものであろう。

学校教育においては、学力を育成することは第一義である。学力は、社会の中でよりよい生活や自分らしさを求めていくときに必要な力であり、豊かな人間性と社会性は切り離して育成することはできない。社会の営みに自ら積極的にかかわり、自分や社会の目標を実現させようとするときに、それを可能にするのは、言葉や知識、技術、道徳などを身につけていることではないだろうか。知識や思考力、感性、想像力などを含んだ学力の向上は、より豊かな人間性・社会性の育成の基本をなすだろう。

人間性・社会性と学力は、互いに影響し合いながら、ともにはぐくまれ高まっていくものであろう。

3 子どもの学びと学力

学力の育成を考えたとき、子どもが自ら求めていく主体的な学びが重要である。また、子どもがよりよく生きようとするとき、自分自身を振り返ることにより確かな自分をとらえ、自分をより豊かにしようとする意欲をもつことが大切になってくる。子どもの学びを支えるものは、自らが求める学びに対する意欲であろう。

その学ぶ意欲を生み出す教師の役割として、「子どもが本当に『よさ』というものを、手応えや実感を伴ってわかること。子どもが共同体の中での役割を担うことで、そのプロセスを通してよりよいものが見えるようになること。さらにその先行きはどういうことになるのかを、一流のものを見るなどすることでかいま見えるようにする（紹介する）ことが大切であり、教師は、『子どもの不思議』にいっしょに付き合うことが重要である。」と佐伯胖氏は述べている。(H.16.3.11 当センターの講演にて)

子どもたちが、未知のものに興味・関心を抱き、学びを深めたいと思うなどの好奇心を生かすことが大切である。また、子どもたちと実社会とのかかわりという観点から、社会の仕組みと個人のかかわりに関する理解を深め、人間としての生き方・在り方を考えるなど、学校において教師が創意工夫を生かした指導を行うことで、子どもの学びを支える意欲を高めることが求められている。

また、これからの生涯学習社会においては、生涯を通じて主体的に学び続けることができる学習意欲をもつことが重要であり、学校と家庭とが連携しながら学習習慣を身に付けさせることが必要である。各学校において「教科」ばかりではなく、「総合的な学習の時間」等を通じて学びへの動機付けを図るとともに、子どもの実態や指導内容等に応じて「個に応じた指導」を柔軟かつ多様に導入することなどの工夫を行うことにより、「わかる授業」を行い、子どもたちの学習意欲を高めることが、「確かな学力」をはぐくむ上で重要な視点であると言える。

4 資質・能力の育成の重視とこれからの知識の在り方

平成14年度の当センターの指導主事研究「教科における基礎学力の育成を目指して」(センター研究紀要第16号 pp.5-20)において、川崎市内の全公立学校を対象にした、「学力の推移の感じ方」の調査では、「表現する力」や「コミュニケーション能力」などに伸びが見られる一方で、「読み書き計算」「健康や体力」など不足を感じるものがとらえられていた。すなわち、従来からの知識・理解に力点を置いた学力の意味では低下が感じられる一方、時代の変化に応じた学力観が育ってきていることがとらえら

れる。また、「子どもたちに大切だと思ふ学力は何か」との問いに、「考える力」が四分の一を占めてトップであり、「豊かな心」「意欲」「読み書き計算」が次に続いていた。このことから、多くの教員は学習への意欲の低下を感じており、基礎・基本の定着の必要性和考える力を付けるためにどのような学習を組み立てていけばよいのか模索している様子が見えてきた。

5 教科における基礎学力

本研究では、「生きる力」の中核をなすものは「思考力・判断力」等の資質・能力であり、それらの資質・能力に支えられ、意図的・計画的に育成される学力を「教科における基礎学力」と位置付けることとした。

この教科における基礎学力は、「知識を獲得する力（資質・能力）」と次の学習に生かされ、新たな知を獲得する礎になる「獲得される知」の相互関係の中ではなくまれると考える。

そして、両者の相互関係を意識した力の育成を図ることが、子どもが自分自身の力で新たに知識を獲得していくことにもつながるものであり、さらには、子どもたちが心豊かに生きていくことにも結びついていくものであろう。当然、教科における基礎学力としての資質・能力と、獲得される知の関係性は、教科や単元（題材）によって違ってくる。そして、そこで獲得された知は最終目的としてでなく、次の学習に生かされ、新たな知を獲得する礎ともなっていくものであろう。

従って、具体的な授業の中で、両者の相互関係を意識した学習を展開し、「各教科における基礎学力」と、それをはぐくむ「指導と評価」について、本稿の最後に提示することとした。

6 指導と評価の一体化

子どもたちに必要な基礎学力の定着を考えた時、評価は極めて重要な位置付けになろう。基礎的・基本的内容の定着を図り、自ら学び自ら考える力を育成するためには、指導と評価のかかわりを明らかにする必要がある。評価は、一人一人に確かな学力を身に付けていくために適切な指導を行うためのものでもある。

従来評価は子どもに向けてのものと受け取りがちであった。教師自らの指導の方向性を定めるものとしても重要なものである。評価の働きとして大切なことは、子ども自らが学習の実現や学びの状況を確認できることであり、学習に現れた変化を通して、教師自身が指導のあり方や教育課程や、単元構成の改善をしていくことでもある。

評価が変われば「指導」も変わる。指導が変われば「評価」も変わるといわれる。教員が子どもに投げかける言葉一つ一つが評価そのものといえる。教師の一人一人の子どもに対する見取りを向上させることで、学習活動も発展し、子どもの自己評価も高くなると思われる。子どもへの、新たな視点、考えるヒント、活動への示唆等のかかわり全てを含んだ、意図的な働きかけが、評価そのものであり、指導と評価の一体化といえよう。

7 評価の機能

評価は指導に生かされるものであり、目標と表裏一体のものである。目標との関係でどのような学びの姿をめざして指導を展開すればいいのかを明確にするとともに、指導の成果を見取るために機能する。その際には、児童生徒一人一人のよい点や可能性、進歩の状況などを評価し、また、学習指導の過程における評価の工夫を進めることが大切になる。

具体的には、評価規準を単元や題材（以下単元とする）を学習のまとめりとして位置付け、学習の過程とともに単元ごとに学力の評価を行っていく。その際に4観点をもとにその単元の学習を通して身に付けようとした資質・能力や知識についての実現状況をとらえることになる。

単元を通してすべての児童生徒に身に付けさせる資質・能力や知識の実現状況を把握するため観点別

評価を重視していくことが求められる。学習の過程において必要に応じて評価を行い、改善点があれば指導を工夫するなど学習の軌道修正を図らなければならない、そのための評価方法や評価内容、評価の時期を決めることが重要になる。

研究のまとめ

今、「学力」や「指導と評価」について考えるときに、最も課題とすべきことは何であろうか。それは、基礎学力の定着であろう。この課題を乗り越えることは、「生きる力」とそれを支える「確かな学力」の獲得につながる。

もともと「意欲」や「力」とは目に見えるものではない。「意欲」や「力」が基になって、活動してはじめて見えてくる。見えないものを育て、活動を見取り、その見取りを子どもに返したり自らの指導に生かしていったりするところに、教師としての役目がある。本年度は、特に「基礎学力」について重点的に取り上げ、昨年度の指導主事研究の考え方に基づき6教科にわたって授業実践を行った。そして、評価方法と指導と評価の一体化に重点を置いて資料にまとめた（実践例は、資料「基礎学力の定着を目指す指導と評価 - 評価方法を中心に -」（平成16年4月）に掲載）。

今後も、子どもたちが、学ぶ意欲をもち、確かな学力を身につけていくために研究をしていきたいと考える。そのためには、さらに子どもたちの学習状況や生活実態等の把握と分析を進めることが必要であろう。

最後に、研究を進めるにあたり適切なお助言をいただきました先生方、研究にご支援、ご助言をくださいました学校教職員の皆様に、心よりお礼申し上げます。

算数・数学科研究会議

【参考文献】

中村 亨史 『「書く活動」を通して数学的な考え方を育てる算数授業』 東洋館出版 2002年
小島 宏 『授業のなかの評価』 教育出版 2003年

【指導助言者】

川崎市立小学校算数教育研究会長（川崎市立白山小学校長） 菊池俊光
川崎市立中学校教育研究会数学科部会長（川崎市立菅中学校長） 後藤信彦
川崎市教育委員会学校教育部指導課 芹澤成司

理科研究会議

【参考文献】

森本 信也 小学校理科『絶対評価の実際』東洋館 2003年
東 洋 『子どもの能力と教育評価』東京大学出版会 1992年

【指導助言者】

横浜国立大学教授 森本信也

川崎市中学校理科部会長(川崎市立西高津中学校長)	根津達郎
川崎市小学校理科研究会会長(川崎市立古川小学校長)	為谷貞義
学校教育部指導主事	深澤 恵

生活科研究会議

【参考文献】

東洋館出版 『初等教育資料平成13年12月号』 「生活科の指導に生きる評価の考え方」	2002年
東洋館出版 『初等教育資料平成12年8月号』 「生活科における基礎・基本と学習指導」	2001年

【指導助言者】

川崎市立小学校生活科研究会会長(川崎市立岡上小学校長)	森 尚子
学校教育部指導主事	川崎 等

図画工作・美術科研究会議

【参考文献】

板良敷敏・三澤正彦 『新しい教育課程と学習活動の実際 - 図画工作 - 』東洋館出版社	1999年
遠藤友麗 『新中学校教育課程講座 - 美術 - 』ぎょうせい	2000年

【指導助言者】

群馬大学教授	新井哲夫
川崎市立小学校図画工作科研究会会長(川崎市立藤崎小学校長)	長瀬克則
川崎市立中学校教育研究会美術科部会長(川崎市立住吉中学校長)	設楽百合子
川崎市教育委員会学校教育部指導主事	金井則夫

家庭、技術・家庭科研究会議

【参考文献】

佐藤文子 川上雅子 『家庭科教育法』高陵社出版	2001年
河野義顕・大谷良光・田中喜美 「技術科の授業を創る」学文社	2001年
工藤文三 「目標に準拠した評価にかかわる諸課題の解決に向けて」指導と評価	2003年

【指導助言者】

横浜国立大学教授 センター専門員	森本信也
川崎市立小学校教育研究会家庭科教育研究会会長(川崎市立川中島小学校長)	渡部和美
川崎市立中学校教育研究会技術・家庭科教育研究部会長(川崎市立御幸中学校長)	垣東節夫
川崎市立中学校教育研究会技術・家庭科教育研究部会長(川崎市立井田中学校長)	渡邊洋子
川崎市教育委員会学校教育部指導主事	和泉田正徳
川崎市教育委員会学校教育部指導主事	鈴木真優美

体育・保健体育研究会議

【参考文献】

北尾 倫彦 『基礎・基本を身につける』 東洋館出版社	1993年
----------------------------	-------

【指導助言者】

川崎市小学校体育研究会会長(川崎市立古市場小学校長)	弦巻輝臣
川崎市中学校保健体育科研究部会長(川崎市立東高津中学校長)	高野俊昭
学校教育部指導課指導主事	渡邊壽久
川崎市総合教育センター研修指導主事	山田義弥

算数・数学科

算数・数学科研究会議

研修員 秋山 起久雄（川崎市立新城小学校） 蟻生 寛郎（川崎市立久地小学校）

佐藤 茂樹（川崎市立南河原小学校）

竹内 和則（川崎市立中原中学校） 宮嶋 俊哲（川崎市立東高津中学校）

研修指導主事 白井 理

1 算数・数学科における基礎学力

算数・数学科は、系統性の高い教科である。今までに習得された知識や習熟した技能を組み合わせることで活用することによって、新しい内容であっても課題を解決することが可能になる。そのことを可能にする力が、資質・能力である。算数・数学科においては数学的な見方や考え方、態度がその中心を担うものであり、自分の考えを表現する力や量感や数感覚、図形に対する感覚なども含まれてくる。

習得された知識、習熟した技能、体験を通して得た感覚、表現する力は獲得された知であり、基礎学力である。しかし、それらの力だけでなく、今までに獲得された知を組み合わせることで考えたり使ったりして、新たな知を獲得する力（資質・能力）もまた基礎学力であると考えられる。そして、獲得された知や資質・能力は、次に新しい課題に出会ったときに基礎学力となって働き、新たな知の獲得につながる、という循環を繰り返しながら、基礎学力は高まっていく。

算数・数学科における基礎学力とは、新しい課題に出会ったときにそれを解決していくために必要なすべての力を指している。

2 算数・数学科の評価

4観点の力は、独立しているものではなく、相互に関連し合っているものである。したがって、これらの力を育成し評価をするためには、教師は、4観点の関連性をふまえて、算数・数学の系統性を十分に意識して、指導をしておくことが必要である。

例えば、「算数・数学的な関心・意欲・態度」の育成には、子どもが気付きや驚きを感じられるようにすることや、感動のある算数・数学的活動を通して、その楽しさや数学的な見方や考え方のよさを実感し、学んだことを課題の解決に生かそうとする態度を培っていくことが大切である。「数学的な見方や考え方」では、抽象的な数学の内容を理解するために、具体的な場面を意識したり、具体と抽象を結びつけて考えたりするようなことが大切である。既習の知識と技能を活用しながら、「数学的な見方や考え方」を身につけ、事象に潜む原理や法則を見いだしていくことも必要となる。また「表現・処理」では、子どもが頭の中で考えたことを、数理的、論理的に表現できるようにしていくことも大切である。「知識・理解」では、処理の手順の理解のみにとどまらず、意味の理解、方法知、量感、数感覚など、多岐にわたっている。これらの知識は、活用できてこそ生きて働く知識になる。このように、課題解決のために活用された知識や「算数・数学的な関心・意欲・態度」、「数学的な見方や考え方」を、総合的にとらえて、高めていかなければならない。

目標に準拠した評価を行うときには、目標は多面的な側面をもつわけであるから、どの側面からとらえるかによって評価は異なったものになってくる。そのため評価の観点を明確にする意味で、4観点で具体的な評価をすることが基本になる。しかし、4観点には関連性があり、子どもの一つの表れをいくつかの観点で見取ることができる。子どもの資質・能力を多面的・総合的に評価すること、評価したことを次の指導に生かすことが大切である。

理 科

理科研究会議

研修員 野口 美年子 (川崎市立大谷戸小学校)

米倉 竜司(川崎市立末長小学校)

吉田 俊一(川崎市立高津小学校)

吉田 崇(川崎市立中野島中学校)

尾幡 裕子(川崎市立田島中学校)

指導主事 葉倉 朋子

1 理科の基礎学力

理科は、自然事象を対象とした学習であり、最終的に科学的な見方や考え方の育成をねらいとしている。そこで、本研究会議では、理科の基礎学力を次の二つと考える。

(1) 問題解決の学習における資質・能力

「見通し(目的意識)」をもった観察・実験を行うということは、学習の主体が子どもにあるということである。それは、自然事象を対象として、問題に対して、子どもが自分の意志で追求を行っていく学習である。その中で、小学校3年から順に6年までの各段階で、「比較する力」「関係付ける力」「要因を抽出する力」「多面的に追求する力」の育成を図っていく。さらに、中学校においては、小学校の資質・能力の育成を充実させていくことと、実験・観察の技能面の育成、分析的な力、総合的な力の育成を図る。これらの資質・能力の育成が、理科の基礎学力と考える。

(2) 主体的な学びの中での知の形成

理科の学習の中で、見通しをもった学習を進めていくことが重視されている。その学習過程の中で、子ども自ら知をつくり出すことが重要になる。これは、与えられて得た知識とは異なり、自ら予想をもった実験・観察を通して、今までとらえていた考えを構築し直すことになる。これが、知を形成していくことと考える。知とは、自らとらえていくものだけでなく、他の友達とのかかわりの中でより一層深められていくものである。知の形成は、自ら獲得していくものであり、次の学びにつなげていくものとして、応用、適用できるものとなり、理科の基礎学力と考える。

この二つの関係性の中に基礎学力があると考える。

2 理科の評価

評価の考えの基盤になるものとして、評価は子どもを伸ばすものであることを確認したい。

そこで、理科の評価の考え方として、一つに子どもの学びを大切にしていこう、ということが挙げられる。その時、学びの動機付け、価値付け、意味づけ、学習の方向付けなど「知の支援」があるだろう。二つ目として、子どもの力の育成を図る、ということである。そのためには、目の前の子どもを目標とのかかわりで評価し、どこにつまずきがあるか、どのように指導していくか、指導と評価の一体化が重視される。それは、適切な環境づくりや情報獲得しやすい環境づくりなどの「知的環境」と友達のよさを認める、安心して学習できる環境としての「心理的環境」に区分される。まとめて、「学びにおける環境の支援」と考える。

ここでは、「自然事象への関心・意欲」「科学的思考」「実験・観察の技能」「知識・理解」の4観点で見ていくことになる。

生活科

生活科研究会議

研修員 大野 恵美（川崎市立鷺沼小学校）

田辺 久美子（川崎市立京町小学校）

中西 憲子（川崎市立百合丘小学校）

松村 元美（川崎市立上丸子小学校）

指導主事 葉倉 朋子

1 生活科の基礎学力

本研究会議では、生活科における基礎学力を次のように考える。

学習指導要領にある生活科の教科目標は、具体的な活動や体験が根底にあり、それらの活動を通して社会及び、自然そして自分自身についての生活を考えられるような学習をした時に、自立への基礎を養うことができるというものである。生活科の基礎学力とは、具体的な活動や体験を通して身に付き、その後の生活や学習に生きて働く力である。その力を身に付けさせるためには、第一に、子どもの意識の流れを大切にす、第二に、自分とのかかわりを大切にした活動や体験をさせることを重視をする、第三に、感性・感受性に訴える体験の積み重ねをさせることが挙げられる。教師が、この三つのことを意識して子どもに力を付けさせた時に、学力が身に付いたといえる。

子どもの意識の流れを大切にす。

自分とのかかわりを大切にした活動や体験の重視

感性・感受性に訴える体験の積み重ねの必要性

2 生活科の評価

生活科における評価の根底にあるものは、子ども理解である。子どもの内面に芽生え育ちつつあることをとらえ、その後の学習活動に一層広げたり深めたりすることが大切である。子どもの学習状況を評価し、子どもが向かっていきたい方向と教師が向かわせたい方向とを接続させようとするところから個に応じた適切な指導が生まれる。そのような指導をするためには、多様な評価方法で子どもを多面的に見取ることが大切である。子どもの多面的な部分をまるごと受け止めることで、次の学習で幅広く学びを広げられる可能性が生まれる。

また、それぞれの授業時間のねらいを明確にするとともに、評価規準を構造化して、活動のまとめ、または小単元などの数時間に対応して評価を継続していく必要がある。

生活科の体験や活動を重視した生活科における評価は、能動的評価と受容的評価の両面から考える必要がある。実際の評価では、この両者を関連付けて活用する事が大切である。

評価方法としては、行動、発言、会話（特に意図した話ではなく話すこと）対話（教師が意図的に話すこと）作品などの観察や分析、問いかけなどが挙げられる。

生活科の日々の授業を進めるに当たっては、児童の背景を理解することと共に、評価を指導に生かすことが大切になってくる。見取った子どもの姿は、評価の記録として蓄積されると同時に、次の活動につながるように教師が意図的に支援するための貴重な資料になりうる。

図画工作科・美術科

図画工作・美術科研究会議

研修員 大高 修 (川崎市立殿町小学校)

河口 順子 (川崎市立京町中学校)

澁谷 加寿子 (川崎市立末長小学校)

小森 岳彦 (川崎市立玉川中学校)

丸尾 明彦 (川崎市立下作延小学校)

研修指導主事 行川 博幸

1 図画工作科・美術科における基礎学力

造形表現活動は、すでに獲得した知(知識や技能など)を新しい状況との出会いによって、同化したり組み直したりして自分が納得できるように、新しい枠組みを構成しながら世界との関係をつくりだす営みといえる。

図画工作科・美術科における基礎学力とは、以下のような点を指している。

柔軟な発想力や形・色・材料で表す技能などの基礎的能力

伝えたい内容を効果的に美しく表現できるようにすること

我が国及び諸外国の美術文化や表現の特質などについての関心を高め、理解し、作品の見方を深める鑑賞の能力

上記で示した基礎学力を身に付けるためにはどのような指導や評価の在り方が求められているのだろうか。

2 図画工作科・美術科の評価

図画工作科・美術科の評価においては、完成した作品からだけではなく、制作過程や、活動過程を通して子ども一人一人を十分に理解・把握していることが大切である。そのためにはどのような評価の在り方が求められているのだろうか。また、指導があって初めて評価することにつながるわけであり、意図的、計画的な指導なくして評価することのみの授業にならないようにすることが大切であろう。

具体的な4観点においてどのように評価情報を得ることが必要なのだろうか。「関心・意欲・態度」を例として示すことにする。評価時期では、題材に対する造形活動のうちでまず、全授業時間の始めのころに1回と、そして少なくとも終盤で1回の計2回は評価する場を設定し、終盤をより重視すべきであろう。また、その評価方法は、活動の様子、学習カード・学習ノート、作品から(制作過程～完成)、作品カード(作品紹介)などの評価方法がある。その様々な評価方法をときには組み合わせるなどして、より高く、正確な子ども理解につなげていく必要があり、その評価との表裏一体として考えられる指導内容を設定することになる。

体育・保健体育

体育・保健体育研究会議

研修員 小泉智則（川崎市立柿生小学校）

後藤建人（川崎市立宮前平中学校）

日景奈美（川崎市立白鳥中学校）

田村光司（川崎市立坂戸小学校）

棟居 謙（川崎市立南野川小学校）

研修指導主事 前島和樹

1 体育・保健体育科における基礎学力

体育学習の基礎学力を考える場合、生涯スポーツを目指す立場を柱に据え、さらに運動の楽しさや喜びを味わうために児童生徒が身に付けておきたい力に着目していかなければならない。すなわち、「どのような運動がどの程度できるのか」という技能（知識）だけでなく、運動の楽しさや喜びを味わうのに必要な資質・能力、すなわち「運動の楽しさや喜びの求め方」「運動の行い方」「運動技能の高め方」などの「運動の学び方」もまた重要な身に付けておきたい力なのである。具体的な学習場面においては、自分に適したためあて・課題をもって運動に挑戦することができることが大切になってくる。このように、運動を通して自ら学ぶ力が、体育・保健体育科の基礎学力であると考えられる。

なお、指導に当たっては、その教科特性を十分に考慮する必要がある。体育・保健体育科では、運動そのものが学習の対象となるため、児童生徒の内在的な「力」がそのまま「能力の差」として現れやすい。そのため「できる・できない」の結果主義では体育好きな子どもがごく少数しか生まれず、生涯にわたるスポーツの実践者を多くはくむことにはならない。では、運動の楽しさを味わうことだけに重点を置いて運動を実践すればよいかというと、それもまた良い結果にはつながらない。競争の楽しさや課題を達成した喜びを味わうことのできる指導を常に工夫していくことが大切であろう。

そこで平成 15 年度体育・保健体育科研究会議は、小・中の連携を視野に入れながら、以下の視点から実践を深めていった。

運動の取り上げ方及び児童生徒の実態に応じた学習過程の十分な検討

運動の学び方を十分に身に付けさせることの重視（目標設定 課題の決定 活動決定 自分自身や友だちとの振り返り等、学習の再構成を検討）

友だちとの豊かなかわり合いを大切に授業

常に児童生徒が運動への自信を深めていけるような指導と評価の在り方の検討

2 体育・保健体育科における指導と評価

「指導と評価の一体化」がよく指摘されるが、それは、指導と評価が遊離した授業が多いことの裏返しである。そのような事態に陥らないためには、指導計画や評価計画を作成する際、「この学習のねらいは何か」ということを常に思考の中心におき、作成の様々な段階でそこに立ち返ることが重要である。また、今までの評価は、学習のまとめの時間に運動のできばえや学習結果だけをもとに、教師が一方的に実施する傾向が見られたが、これからの評価は、まず児童生徒自身が今持っている力を知り、自分を振り返りながら主体的に学習を進められるように支援することから考える必要がある。その上で、一人一人のよさや可能性をしっかりと見つめ、観点別学習状況の各観点の趣旨を理解して評価規準を適切且つ具体的に設定することが大切になってくる。本研究では「学習内容と評価の場面」「評価の方法と実施する場面」についての考え方や評価の進め方について明確に示した。また、評価計画と評価方法も具体的に提示し、毎時間ごとの評価重点項目を挙げて、授業構想の参考になるようにした。

家庭、技術・家庭科

家庭、技術・家庭科研究会議

研修員 小野瀬三智子（川崎市立夢見ヶ崎小学校） 森島 美子（川崎市立有馬小学校）
板谷 直子（川崎市立生田小学校） 望月 隆（川崎市立生田中学校）
鈴木 由美子（川崎市立長沢中学校）
研修指導主事 吉田 和江

1 家庭、技術・家庭科の基礎学力

家庭、技術・家庭科の学習では、衣食住などに関する実践的・体験的な活動を通して、家庭生活への関心を高め、家庭生活に必要な基礎的な知識と技能を身に付け、個人としての生活の自立に向けて、その基礎となる実践的な態度を育てることをねらいとしている。その育成のために、

家庭生活や生活と技術のかかわりに関心をもつこと及び基礎的理解 生活的な自立の基礎となる生活に必要な基礎的知識・技能 家族の一員として生活実践しようとする態度 家庭生活の課題を見付け、自らの思考力・判断力を発揮して生活を工夫しようとする力

を家庭、技術・家庭科の基礎学力ととらえることとした。

これらの基礎学力は、日常生活に関連のある学習場面で、それまでに培われた経験知である知識・技能を主体的に活用し、自分の考えを働かせながら工夫する体験を積み重ねることで身に付いていく。また、家庭生活を改めて見つめ直したり実感したりする中で、そこから自分なりの課題を見付け、その解決を図ったりするなど、学習活動全体を通して子ども自らの思考力や判断力を発揮して知を獲得していく関係性の中で培われていくと考える。

2 家庭、技術・家庭科の評価

評価の考え方の基盤となる家庭、技術・家庭科が大切にしている実感を伴う学び、生活の実感をもつ学びは、子どもたちが「なるほど」と納得する学びであり、価値ある体験を通して学びの実感が伴うものである。そのためには、学びに対して必要感のある課題に出合うことが大切である。

教科で多く実践されている「観察法」や「ワークシート」による評価は、多様な学習活動をしている子どもたちの姿や思いを見取ったり、次の授業へつながる振り返りを工夫したりするために大切である。また、製作学習の過程で子ども一人一人の学びの過程を丁寧に見取り、声かけやワークシートへの記述を行うことで、子どもの学びへの意欲が途切れず、自らの製作物への愛着心や家族への思いやりの心が着実に育っているという報告もなされている。教科のねらいに向かいどのような学習方法も可能であるが、態度の評価の難しさやワークシートの内容についての検討も求められており、教師は、各題材において育てたい資質・能力と評価の視点を明確に定めて評価すること、基礎学力を見据えた指導計画・評価計画を立てることが大切になってくる。

そこで、本研究会議では、以下の3点を育てたい基礎学力ととらえ、小学校・中学校の関連を考慮した「住まい題材」について、課題解決学習を柱としたプランを作成することとした。

- | |
|--|
| <ul style="list-style-type: none">・ 身近な生活や技術の課題を解決する力・ 家族や近隣の人々と協力して、よりよい生活を工夫しようとする実践的な態度・ 日常生活や家庭生活を大切にしている心情や態度 |
|--|